

事例から学ぶ

介護事業者の事故対応

端座位の状態から前方に転倒して額を裂傷

－塩化ビニールの床材で裂傷になる－

■施設の床はケガが多い

Bさんは、軽度の半身麻痺がありますが自力で歩行することができます。ただ、認知症が重いこともあり、時々急にバランスを失って転倒します。特に夕方不穏になることが多くこの時間帯に転倒が多いので、職員が交代で見守るようにしています。ある日、Bさんにデイルームに居てもらい職員が見守っていましたが、ちょっと目を離れた隙に居室へ戻ってしまいました。すぐにBさんを探して職員が居室に行くと、Bさんはベッドの端座位の状態から立ち上がろうとしていました。Bさんは勢い良く立ち上がったので、その反動で前方に転倒して床に前頭部を打ちつけひどく出血しました。すぐに救急車を呼んで病院に搬送しましたが、額を5針縫うケガになってしまいました。

居宅のように床が畳やカーペットであれば、打撲部位が滑るためかすり傷で済みますが、施設の塩化ビニール材の床は固い上に滑性が無いために、ひどい裂傷を負うことが多く、思わぬ大ケガをします。

防げない転倒事故はケガを防ぐ対策を講じる

■座位からの前方転倒はほとんど防げない

施設やデイサービスなどの施設では、車いすやベッドなどに端座位で座っている状態から前方に転倒する事故が良く起きます。これらの転倒事故に対して現場の介護職員は、「近くに居てもらって交代で見守る」という対策を立てることが多いです。しかし、職員が近くで見守っていても、これらの前方転倒事故はほとんど防げません。株式会社安全な介護社では、見守り中の転倒事故の防止実験をやりましたが、次の表の通り30回中7回しか防げませんでした。



見守りの方法	転倒防止回数	
じっと見守っている	すぐに倒れる	0回/5回 (0%)
	1歩踏み出して倒れる	3回/5回 (60%)
見たり見なかったり	すぐに倒れる	0回/5回 (0%)
	1歩踏み出して倒れる	3回/5回 (60%)
作業をしながら	すぐに倒れる	0回/5回 (0%)
	1歩踏み出して倒れる	1回/5回 (20%)
合計	7回/30回 (23.3%)	

■床にカーペットを敷くだけでケガを軽減できる

防げない事故に対しては、どのような対策を講じれば良いのでしょうか？座位からの前方転倒を防ぐことは難しいため、転倒してもケガをさせない対策、つまり損害軽減策を講じることが大切です。例えば、図のようにベッド脇に厚さ6mmの衝撃吸収力の高い低反発素材のマットを床に貼り付けることで、裂傷や骨折などを防ぐ対策はいかがでしょうか。この衝撃吸収マットは適度な滑性があり歩きやすく、厚みも少ないのでつまづくことも少ないと考えます。



発行責任者

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
 マーケット開発部 市場開発室
 担当 堀江・窪田
 TEL 03-5789-6456

担当課・支社 代理店